

教育・保育職者のもつ子ども観

住田正樹（放送大学）

横山 卓（福岡女子短期大学）

○中村真弓（尚絅大学短期大学部）

○山瀬範子（四国大学短期大学部）

清水一巳（純真短期大学）

I 問題とアプローチ

本発表は、教育・保育職者のもつ子ども観を明らかにすることを目的とする。子ども観とは、人々が「子ども」に対して付与するイメージや価値観をさす。私たちは、子ども観を基に子どもたちを判断し、子どもたちに対する行動を決定していく。

今日、児童虐待や子どもに対する残酷な犯罪や少年犯罪など、子どもをめぐる様々な事件についての報道がマスコミを賑わせている。これらの報道は、子どもに対する大人の不可解な行動（例えば、児童虐待や子どもに対する犯罪）と子どもたちの（大人からみて）不可解な行動（例えば、少年犯罪やマナーの問題など）のふたつの方向に類別できるが、いずれにせよ、その根幹にあるのは、「子どもがわからない」、という子ども観の揺らぎである。この揺らぎが、「子どもに対する接し方がわからない」という子どもに対する行動の揺らぎにもまた関連していく。子どもがわからない、だから、子どもにどう接すればよいかわからないのだ。

このような社会的状況を受けて、本発表では、特に、教育・保育職者の子ども観に着目する。どのような子ども観をもつかによって、その人の行う教育・保育の方向性が決まるため、教育・保育職者にとって、職務を遂行する上で、子ども観は特に重要な価値観のひとつ

となる。したがって、教育・保育職者は、その養成課程において、専門的知識・技能の習得や実習での経験を通して、自身の子ども観を確立していくのである。

加えて、この子ども観は、職場で、実際に、子どもたちと接することによって変化していく。日常的な子どもとの接触により実際の子どもの姿を見ることや、周囲の教育・保育職者と関わることにより、子ども観が変化していくのである。日常的な子どもの接触という点では、親と子どもの接触や地域の大人と子どもの接触によっても、一般の大人のもつ子ども観も、やはり、変化するといえる。また、育児サークルや子育て支援の場で、同じ年頃の子どもの持つ親との交流を通して、一般の大人のもつ子ども観が変化することもあるだろう。しかし、教育・保育職者は子どもに関する専門的知識を持っているという点で、彼ら/彼女らとは、決定的に異なる。専門的知識を持っているということが、子ども観の変容にどのような影響を持つのか。近年、育児に戸惑う親に対しての子育てに関する教育や児童虐待を行ってしまう親に対する教育について盛んに議論がなされているが、このような、子どもに関する専門知識を持っていることがその価値観と行動にどのような影響を与えるかをみる上でも、本発表は一定の意義を持つといえるだろう。

II 調査の概要

標本は、F県内において都市圏を構成している中核都市と周辺部を対象として、層化2段階抽出法によるサンプリングを行ない、調査の対象地・対象者を選定した。結果、1市2町（市部と郡部）の各選挙人名簿から合計2503人を抽出し、2003（平成15）年の7月から8月にかけて郵送調査を実施した。有効回収票は1349票、回収率は53.9%であった。

III 調査結果の分析

(1) 子どものとらえ方

①子ども期の開始年齢と終了年齢

常日頃、子どもたちと関わっている教育・保育職の者では、子どものとらえ方に違いがあるのだろうか。まず、子ども期の開始年齢と終了年齢を見てみよう。人々は、子どもを何歳から何歳までと考えているのだろうか。子ども期の開始年齢を見ると、全体では、「1～3歳から」開始するとする者が最も多く（39.4%）、次いで「4～6歳から（29.4%）」ないし「誕生から（25.6%）」を開始するとする者が多い。教育・保育職であるかどうかでは、有意差は見られなかった。

一方、子ども期の終了年齢はどうだろうか。「10～12歳まで」で終了するとする者が最も多く（41.1%）、次いで「13～15歳まで」で終了するとする者が多い（31.9%）。義務教育段階の小学校ないし中学校卒業程度までを子どもだととらえているといえる。これについても、教育・保育職であるか否かで違いは見られなかった。

②子ども期が終わるのは

多くの人が、子どもが中学生あるいは高校生になるのをきっかけとしたり、「自分のこと

を主張できるようになった頃」を契機に、子ども期は終わると考えている。また、教育・保育職に特徴的であるのは、大学生になった時あるいは就職を機に、子ども期が終わると考える傾向が見られたことである。

③理想の子ども像

遊び方、勉強、遊びと勉強、親子関係、仲間と大人、礼儀、自己主張と協調性、公共性、能力といった9項目について、理想の子ども像を尋ねた。教育・保育職であるかどうかでは違いが見られず、人々は、社会のきまりを守り、自己主張ができ、大人の言うことを聞き、仲間とよく遊び、友達が分からなければ、勉強を教えてあげるような優しい子どもを理想としているといえる。

④子どもたちを育てていく方向性

そして、子どもをどのように育てていくべきかということについては、全体的に「社会のきまりを守り人に迷惑をかけない公共心をもつ（75.2%）」、「自分でやりがいのある仕事をする（54.3%）」ように子どもを育てていくべきだとする者が多かった。また教育・保育職では、「自分の興味・関心に従って楽しく暮らす」べきだとするのが多く見られたが、非教育・保育職では、社会のきまりや公共性の育成を選択する者が多かった。

(2) 子どもたちの現状

①今の子どもたち

次に、今の子どもについて、それぞれをどのように見ているのだろうか。子どもの性格、意識、行動、関係、態度、表現の各側面について尋ねた。全体的に否定的な見方をしているが、非教育・保育職の者では、「物怖じしないで行動する」、「衝動的な行動が多く、また目先の利害で行動する」といった見解を持つ

ものが多く、教育・保育職では、「素直である」と肯定的に捉える傾向があり、有意差が見られた。

②子どもの成長・発達について

次に、子どもたちの性格、考え方、態度、行動、人間関係、服装、言葉遣いについて、どのように感じているか、望ましい方向に育っていると思うか回答してもらった。全体的に、「子どもらしくないので、あまり好きではない」という傾向が強いのであるが、保育・教育職ほど、子どもの成長・発達の様相を好ましく思っている。彼らは、子どもの考え方、行動、人間関係、性格については、「子どもらしくて、好ましい」としており、統計的有意差が見られた。(表1参照)

また、育っているかどうかということについては、さらに否定的な傾向が見られ、実際に、子どもの教育・保育に関わっている者であっても、「あまり望ましい方向に育っていないと思う」と答えている。

(3) 子どもの成長・発達をめぐる問題

では、なぜ子どもの成長・発達について好ましく感じられず、育っていないと思うのだろうか。子どもの成長・発達において、何が問題となっているのだろうか。大半の人は、子どもの成長・発達における家庭環境の影響の大きさを指摘している。そして、今日の家庭環境、友人・仲間関係、学校生活、地域社会、社会的環境についての問題点を尋ねたところ、社会全般の規範意識が低下していること、心の豊かさや思いやりの心が失われていること、親が子どもに干渉しすぎたり、甘やかしすぎることなどを問題にしている。また、非教育・保育職の者ほど、学校生活の指導や社会環境の低下を問題として挙げていた。(表2参照)

(4) 子どもに対する働きかけ

子どもに対する行動ではどうだろうか。教育・保育職にある者が、職場を離れ、地域での生活において、子どもとどのように関わっているのだろうか。まず、地域における人間関係について見てみよう。挨拶をする人、立ち話をする人、頼みごとをする人がいるかどうかを尋ねた。全体としては、「いる」と回答したのは、挨拶をする人(68.3%)、立ち話をする人(57.9%)、頼みごとをする人(49.3%)である。また教育・保育職ほど、挨拶をする人が「いる」とする者が多かった。地域の子どもの会話頻度でも、教育・保育職ほど、子どもと話す機会が多かった。しかし、子どもが危険な遊びをした場合の対応の仕方では違いは見られなかった。多くの大人が、「注意をする」(72.7%)のであり、「放っておく」(18.9%)、「知らせる(8.4%)」は少なくなっていた。

では、地域の子どもの育成団体活動あるいは子ども行事への参加ではどうであろうか。子ども会、スポーツ集団、子どものサークル等への加入は、教育・保育職の加入が多く、その活動を重視しているといえよう。しかし、実際に参加しているかどうかでは違いは見られなかった。また、子ども行事への参加希望は、教育・保育職であればあるほど高くなっていた。

IV まとめ

* 大会当日、詳しい資料を配布します。

【付記】 本発表は、「現代日本の『子ども観』に関する実証的研究」(平成13~15年度科学研究費補助金基礎研究(C)(2)、代表:住田正樹)の調査に基づいている。

表1 子どもの成長・発達について（「子どもらしくて、好ましい」と回答した比率）（％）

	教育・保育職	非教育・保育職	全 体	
近頃の子どもたちの性格について	39.1	31.6	33.1	*
近頃の子どもたちの考え方について	36.7	26.4	28.5	**
近頃の子どもたちの態度について	31.8	26.3	27.5	
近頃の子どもたちの行動について	34.9	25.1	27.1	**
近頃の子どもたちの人間関係について	37.3	29.3	30.9	*
近頃の子どもたちの服装について	37.1	32.4	33.3	
近頃の子どもたちの言葉遣いについて	21.6	19.8	20.2	

*** P<.001 、 ** P<.01 、 * P<.05

表2 子どもの成長・発達における問題点（「はい」と回答した比率）（％）

	教育・保育職	非教育・保育職	全 体	
親と子どもの会話やコミュニケーションが少ない	83.9	85.3	85.1	
親が自己中心的である	79.0	80.7	80.3	
親が子どもに干渉したり、親が子どもを甘やかしすぎる	90.8	94.3	93.6	
子どもたちの遊び場が少ない	79.5	76.7	77.3	
子どもの数が少なくなったために、家の近所に子どもたちがいなくなった	87.3	87.5	87.5	
学校の先生と子どもたちの関係が薄れている	71.0	79.0	77.4	*
子どもに対する学校の指導が毅然としていない	67.5	78.1	75.9	**
学校の授業が進学中心の勉強になっている	73.4	84.4	82.1	***
地域での活動や行事に無関心な大人が多い	83.3	86.3	85.7	
地域で子どもたちが遊んだり、スポーツをしったりする場や機会が少ない	75.2	76.5	76.2	
地域の大人の人が子どもが無関心になっている	77.09	79.1	78.6	
社会全般の規範意識が低下している	92.6	96.6	95.8	**
社会全般に心の豊かさや思いやりの心が失われている	93.2	96.3	95.6	*
テレビや漫画などから、子どもたちが悪い影響を受けている	84.0	86.9	86.3	

*** P<.001 、 ** P<.01 、 * P<.05